

書 評

Nicola J. Watson, ed., *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture*
(Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009)

大 石 和 欣

かつて大学受験浪人をしていた頃、永井荷風にはまってしまった。作品を読み耽った後、お彼岸近くだったこともあり、ふと雑司ヶ谷に墓参りに行くことにした。花と線香とお酒を手向けて拜んでみると、本で読んでいた時とは違い荷風という人間の実在を確かめられた気がして、なんだか懐かしさと親しみを感じたのを憶えている。同時にそれは自分を再確認する墓参りでもあった。

それは根拠のない錯覚なのかもしれない。しかし、墓はその人が生きていた証であり、死者と私たちをつなぐ縁であり、歴史的時間の標徴でもある。作品や日記、史料などのテキストだけでなく、その人が用いた文具などの遺品、書齋や家を通して過去への時間へアクセスすることは可能だ。そこには想像力を介した死霊との邂逅、一種のエピファニーが生起する磁場が発生している。

同様の経験は多くの人たちが体験するものではないだろうか。ウェストミンスター寺院の「文人顕彰コーナー」やハウスのブロンテ牧師館などの文人たちの墓や家、ヘイスティングズ古戦場やハドリアヌスの防壁といった史跡を訪れる時、私たちは過去の人々の足跡に想いを馳せ、亡失した歴史的時間を再生しようと想いをめぐらせる。「言説」では手にできない歴史の実在性、過去のリアリティの希求は、集合的記憶の共有と再構築を追い求める旅路でもある。

ニコラ・J・ワトソンが編集した本書は、19世紀に盛んになるそんな文人たちの旧跡を辿る「文芸観光」(literary tourism)の文化的意味を探る充実

した論文集である。ヴィクトリア朝期のイギリスに軸を据えながらも、テーマはシェイクスピアやアメリカ人旅行者、さらには南アフリカの最新動向まで扱っている。視野の広がりや散漫になることなく文芸観光研究の奥深さと可能性を示している。

文芸観光はなにも19世紀にはじまったものではない。第1章が詳述するように、アヴィニョンにあるペトラルカの家は16世紀初頭に観光地となっていた。詩の中で彼が讃えた「麗しのラウラ」は実在の人物として扱われ、彼女が住んだと言われる家や彼女が使ったとされる便器までがまことしやかに保存されていく。1525年には観光地図が作成され、その8年後にペトラルカの墓が発見されることで観光ブームは一気に加速していくことになる(pp.15-16)。虚構が歴史の中に織り込まれ、新たな歴史的事実性を獲得していったのである。

17世紀から18世紀にかけてのグランド・ツアーにおいても文芸観光は行われるが、その流行はやはり19世紀である。契機の一つはJohn Murrayの*Hand-Book for Travellers on the Continent* (1836年)であろう。有用な旅行情報に加えて、ロマン主義文学に描かれた風景描写を案内書に引用することで観光に文化的な価値を付与したのだ(9章)。この時代、ドイツのペデカー社の観光案内書も出回り、さらにトマス・クックによって国内・国外旅行の門戸が大衆にも開かれていったことに注意する必要がある。

しかし、前後の時代と比較して19世紀の文芸観光旅行にどんな特異性を見いだせるのだろうか。その断絶と連続性について本書は明確な答えを提示してはいない。

形態的に言えば墓参りや旧跡詣では昔から現代まで変わることなく連続として続いている。第2章が論じるように、墓参りは死者との対話による歴史的時間への参入であり、その記録は新しい文学的言説を紡ぎだす創造的言説でもある。死者の名声を高めたり、新たな神話を生み出すからである。遺品や旧跡を通して死者を解釈し直し、新しいテキストを産出するいわば解釈学的プロセスが内包されているのである。

それは文化的伝統の再確認と再構築の過程でもあり、それが顕著な傾向を示していくのがヴィクトリア朝だと思われる。ロバート・バーンズが好例だろう。バーンズの没後26年目に、詩人ヒュー・エーンズリーは自らの

出身地でもあるエアシャーの地霊としてバーンズを讃えた (*A Pilgrimage to the Land of Burns and Poems*, 1822)。しかし、19世紀半ばになるとバーンズは『オシアン』やスコットの小説群とともにスコットランドの国土と文化全体を指す愛国的な「表示記号」として機能する (pp. 40–41; 3章)。酒と女性に耽溺するバーンズの放蕩は糊塗され、地理的境界線もかき消されてしまう。喪失感が郷愁を掻き立て、記憶を攪乱し、地霊の神話化を促したのである。

19世紀のアメリカ人作家たちの旅行記にも同様の傾向が見られる (15～17章)。彼らにとってイギリスの文学的伝統は母なる文化的土壌だが、合衆国独立後は自らの「非嫡出性」(illegitimacy)を強く意識する (p. 184)。それゆえに彼らのイギリス旅行記には、型通りの反応に「抵抗」する修辞が入り込む (p. 176)。ワシントン・アーヴィングがスコットの旧宅から持ち帰った葛を自宅に移植したのは象徴的行為と言えよう。イギリスの文学遺産を相続しながらも新たな文化的土壌において「代替的な自国の美学」を追究するアメリカ作家たちの自負の念を示している (p. 176)。

一方で、文芸観光は伝記を読む行為にも似ている。サムユエル・ジョンソンは「伝記作家の仕事はその人の家庭生活の内部に想いを馳せ、日常生活の些事を提示することである」と言ったが、私たちが彼らの旧宅に足を踏み入るのは、まさに彼らの日常的私生活を想像したいがためであろう (p. 50; 4章)。William Howittの*Homes and Haunts of the Most Eminent British Poets* (1847年)が示唆するのは、19世紀半ばに文人たちの旧跡が次々と公開され、人々が彼らの私空間を覗き見る特権を嬉々として享受していく状況である。

ハウースの牧師館訪問もギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』によって「合法化」されるが (p. 128; 11章)、スコットの居宅アボッツフォードも「文学的建築物」として多くの巡礼者を引き寄せた (p. 64; 5章)。『ミドロジアンの心臓』に描かれたエディンバラの牢獄の扉など作品内に登場する事物が内部に組み込まれた家は、再構築されたテキストとして立ち現れる。訪問者たちは敷居をまたいだ瞬間から、作家と作品に対しての再解釈を迫られるのである。

シェイクスピアの生家も19世紀半ばに再構築された歴史である。寄付金によって家の買収と復元が可能になるが、元型が特定できないために困難を極めた。結局、16世紀以後の内装をすべて除去し、外観については残存

する 18 世紀の挿絵に基づいて「復元」したのである。そこには不可避免的にヴィクトリア朝の「イデオロギー」が形成するシェイクスピア像が刷り込まれていく (p.81; 6 章)。ストラットフォード・アポン・エイヴオンの町そのものも「イングリッシュネス」を体現する理想的な田園生活として保存されていった (8 章)。伝記的・歴史的事実とは無関係に、トポスはヴィクトリア朝人による独自の歴史解釈を反映し、新しい形と価値を付与されたのである。

文芸観光旅行の波は 19 世紀末にも起こる。ハーディが描いたウェセックスが重要視され出すのも世紀末であり (14 章)、ワーズワスが住んだダヴ・コテッジが博物館になったのも 1890 年である (7 章)。Stopford Augustus Brooke の *Dove Cottage: Wordsworth's Home from 1800-1808* (1890 年) はダヴ・コテッジを遺品・原稿保存のための博物館にする目的で書かれたプロパガンダだが、ワーズワスと妹のドロシーを亡霊として登場させている点が面白い。記憶の再生と過去の再解釈を試みるこうした「霊視」(ghosting)こそこの時代に興隆する「博物館化」(Musealisation)の本質であろう (pp. 86-87)。公開直後からワーズワス博物館は世界中から訪問者を呼び込み、記憶の顕在化と共有は現在でもワーズワス研究の累積と再解釈を促し続けている。

文学テキストと記憶とトポスとの融解を通じた文学・文化の再構築は世紀末の他の発刊物にも顕著である。William Robertson Nicoll が 1891 年に発刊した *The Bookman* は文芸ゴシップに加えて、文芸トポスを記事にすることで文学遺産の再確認と文壇の活性化を推進した (10 章)。Robert Allbut の *London Rambles "En Zig-Zag" with Charles Dickens* (1886 年)、Laurence Hutton の *Literary Landmarks of London* (1885 年)、John Hassard の *A Pickwickian Pilgrimage* (1871 年) などは、ロンドンにおけるディケンズなどの作家と作品にまつわる場所を徘徊することで集合的記憶の活性化と文化の再構築を助長した (12~13 章)。

こうした文芸観光の興隆を支える心性について本書は究明を放棄しているが、ナショナル・ギャラリーの設立、ナショナル・トラストの創設、『国民伝記辞典』(*DNB*)や『オックスフォード英語辞典』(*OED*)の刊行が 19 世紀末期に集中していることと無関係ではなかろう。イギリス帝国の文化的権威の発揚というよりも、むしろ帝国の拡張に伴う社会の流動化、植民地

支配の結果としての異文化や異言語の流入と混交がもたらした文化の拡散と混乱こそ、死滅した過去の遺産を掘り起し、再構築する行為を動機づけているものではなかろうか。

文芸観光研究は無限の可能性を秘めている。南アフリカではライダー・ハガードや同時代の作家たちにまつわる土地を観光地化するプロジェクトが遂行された（18章）。興味深いのは、そうしたトポスを私たちがウェブサイトを通して^{ヴァーチャル}仮想的に来訪し、記憶の再生とテキストの再解釈に参加できることである。

文芸観光旅行の研究は、文学、文化研究、さらには歴史学の領域にまたがると同時に、資料・史料を印刷物や草稿に限定せず、史跡や家、さらにはインターネットにまで拡張することで、豊かな可能性を切り開いている。その意味でも文芸観光はさらなる文化と歴史の再構築を促すダイナミズムを宿している。